

# St. Luke's International University Repository

## マズローの基本的欲求の階層図への原典からの新解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Abraham Maslow' s hierarchy of needs pyramid, Abraham Maslow, application to nursing 作成者: 廣瀬, 清人, 菱沼, 典子, 印東, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/2806">http://hdl.handle.net/10285/2806</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## マズローの基本的欲求の階層図への原典からの新解釈

廣瀬 清人<sup>1)</sup> 菱沼 典子<sup>2)</sup> 印東 桂子<sup>3)</sup>

### Abraham Maslow's Hierarchy of Needs Pyramid : A Reexamination from the Perspective of His Original Work

Kiyoto HIROSE, PhD<sup>1)</sup> Michiko HISHINUMA, RN, MS<sup>2)</sup>  
Keiko INDO, RN, PHN, MSN<sup>3)</sup>

#### [Abstract]

This paper aims to reinterpret the true meaning behind the diagram used to depict Maslow's hierarchy of needs.

Maslow's hierarchy of needs is often shown as a pyramid and is an important model widely utilized in nursing. Despite the fact that it is often cited in nursing textbooks, it was however, not found in the 1987 Japanese edition of "*Motivation and Personality*." Moreover, a review of both psychology and fundamental nursing textbooks uncovered at least five versions of the pyramid diagram, further adding to the confusion. Turning our attention to each of the chapters titled in A Theory of Human Motivation in "*Motivation and Personality*" (1<sup>st</sup> edition in 1954, 2<sup>nd</sup> edition in 1970), we discovered that it was actually Goble, who was Maslow's spokesman, who drew the diagram based on Maslow's theory, and not Maslow himself.

Originally Goble mixed both the physiological needs and growth needs into one diagram. We believe that this is the reason why there has been so much confusion over what Maslow's true intention behind his theory was. Here, we propose a new diagram of Maslow's hierarchy of needs based on his original work and attempt to reexamination the true meaning of his theory.

[Key words] Abraham Maslow's hierarchy of needs pyramid, Abraham Maslow, application to nursing

#### [要 旨]

本稿は、マズローの基本的欲求の階層図とは何かについて再検討することを目的としている。この階層図は看護学において、広く流布している重要なモデルである。しかしながら、看護系テキストでよく引用される三角形の階層図は、マズローの『人間性の心理学』（邦訳書、1987）には記載されていない。心理学および基礎看護学の複数のテキストを検討したところ、マズローの基本的欲求の階層図は少なくとも5種類あり、きわめて錯綜していることが判明した。そこでマズローの『人間性の心理学』の初版（1954）とその第2版（1970）の「人間の動機づけに関する理論」の各章を中心に検討した結果、基本的欲求の階層図を描いたのは、マズロー本人ではなく、彼のスポークスマンであったゴープルであったことが判明した。この図には、基本的欲求の階層理論と高次欲求論の2つが混在して描かれており、マズローの真意を分かりにくくしたと考えられる。マズローの原典に基づいた新たな基本的欲求の階層図を提案し、その階層性の真意を再確認した。

1) 聖路加看護大学 心理学 St. Luke's College of Nursing, Psychology

2) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing

3) 聖路加看護大学大学院博士後期課程 St. Luke's College of Nursing, Graduate School Doctoral Course

〔キーワード〕 マズローの基本的欲求の階層図, アブラハム・マズロー, 看護学への応用

## I. はじめに

### 1. 最初の問い

Henderson V. (1897-1996) の『看護の基本となるもの』<sup>1)</sup>は、看護界の基本文献である。この中でヘンダーソンは、“基本的欲求”という言葉を使って看護を説明しているが、ヘンダーソンの“基本的欲求”は、マズロー(1908-1970)による人間の5つの基本的欲求に類似しているという指摘がある<sup>2)</sup>。

確かにヘンダーソン(およびナイト)も、彼女の名著『看護の原理と実際』のⅡ巻<sup>3)</sup>にマズローの説を紹介している。しかし、ヘンダーソンはそれ以前から“基本的欲求”について述べており、自らの“基本的欲求”の論拠について、生理学の内部環境の恒常性の理論と、心理学ではThorndike, E. L. (1874-1949)の影響を受けたと述べ、マズローを引用はしていない<sup>4)</sup>。ソーンダイクはコロンビア大学で1899年から1940年まで過ごしており、ヘンダーソンがコロンビア大学のティーチャーズカレッジの学生時代に出会っているのはうなずける。

ヘンダーソンの記述では、マズローはひとつの説として引用されているに過ぎない。しかし、自己実現を最上位に置き、下位の欲求が満たされないと上位の欲求も満たされないように示された、マズローの基本的欲求の三角形の階層図は、看護系のテキストにしばしば引用され<sup>5)-7)</sup>、マズローに基づいてヘンダーソンの基本的欲求が成立しているかのように読み取れる記述もある<sup>8)</sup>。

ヘンダーソンの“基本的欲求”とマズローの基本的欲求は、切り離して考えてよいのであろうか。もし、マズローの基本的欲求がヘンダーソンの“基本的欲求”に影響しているならば、ヘンダーソンの『看護の基本となるもの』を理解する上で、マズローの基本的欲求をよく理解する必要がある。この問いを持って、今一度マズローの『人間性の心理学』(“*Motivation and Personality*”)をひもといた。

### 2. 新たな問いの発生

ところが、看護学のテキストに引用されている、三角形の基本的欲求の階層図は、どこの頁にも描かれていなかった。それどころかマズローは、基本的欲求の階層は不動のものではない、次の欲求が現れる前に、その前の欲求が100%満たされなければならないという誤った印象を与える恐れがあるといっていたのである<sup>9)</sup>。

今さらながらではあるが、見慣れているマズローの階層図とは、いったいなんなのであろうか。マズローの基本的欲求の階層図はどこから出てきたものかという、新

たな疑問が生じた。

生理的欲求は85%、安全の欲求は70%、愛の欲求は50%、自尊心の欲求は40%、自己実現の欲求は10%が充足されているのが普通の人間ではないかとマズローは述べている<sup>9)</sup>。このマズローの真の意味を伝えていない階層図を鵜呑みにしてきたことで、マズローを誤解して使ってきたと反省せざるを得ない。

そこでマズローの基本的欲求の階層図のルーツを探る作業を開始した。

## II. マズローとは誰か

ここでは、基本的欲求の階層図について検討する前に、マズローがどのような人物であったのかについて、彼の研究経歴を中心に簡単に振り返っておきたい。この理由は、これを振り返ることによって、彼が基本的欲求の階層理論を提起した必然性の一端について、われわれの理解が深まると考えられるからである。

1908年にニューヨークのブルックリンに、マズローは貧しいロシア移民の息子として誕生した。その後、ウィスコンシン大学で1930年に文学士を、1931年に文学修士を、そして1934年に文学博士を取得した。同大学へは、文学士の学位を取得した直後に採用され、1935年まで5年間助手として働いた。

ところで、マズローは最初から人間性心理学的な立場をとっていたわけではなかった。当時、彼は、ヒトではなく、サルを対象にして研究を行っていた。この理由は、1930年に、博士を取得したばかりのハリー・ハーロウがウィスコンシン大学に助教授として赴任したことと関係している。マズローが動物を被験体にしてきた事実から推測できるように、この頃の彼は行動主義の影響下にあった。

しかしながら、マズローが単なる行動主義者でなかったことは、次の発言から理解できる:「一匹一匹のサルが好きになっていたがゆえに、そうでない場合よりずっと真に迫った正確な結論に到達できた」<sup>10)</sup>

その発言は行動主義の影響を受けながらも、人間性心理学の萌芽を見て取ることができる証左といえるであろう。それでは、その影響を脱却して、彼が人間性心理学を提唱する契機はなんであったのだろうか。それは長女の誕生であった。その後、彼は「最初の赤ん坊が私を変えた」「行動主義はもう耐えられないほど馬鹿げたものに思われた」「この小さな神秘的な生物を見てみると、自分が馬鹿げているように思えた」「その神秘とまさにコントロールとは無縁であるという感じに圧倒された」

と語ったといわれている<sup>10)</sup>。

われわれは、これらの発言にマズローが行動主義にあきたらず、人間性心理学へ向かって踏み出す第一歩を見て取ることができる。

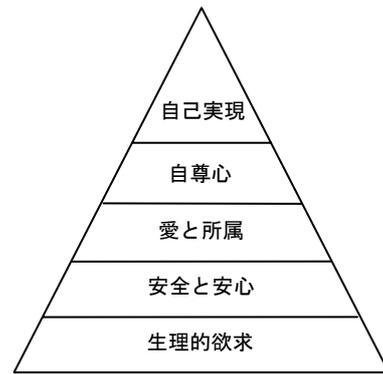
### Ⅲ. マズローの基本的欲求の階層図とは何か

ここまでにおいて、われわれはマズローが人間性心理学を標榜していたわけではなかったことを確認した。しかしながら、かつて行動主義者であったことは、彼が生物学的基礎の観点から行動を検討できる大きな理由になったと考えられる。このことは、たとえば基本的欲求の階層理論において、生理的欲求がそれ以外の欲求の下位に位置づけられる根拠となったといえよう。

マズローの基本的欲求の階層理論は、彼の諸理論のなかでもっともよく知られたものであり、誰もが三角形の基本的欲求の階層図を想起するであろう。しかしながら、ここでは、この基本的欲求の階層図とは、そもそもどのような図なのかという問いから論じ始めたい。この理由は、本稿において基本的欲求の階層図が中心的な論点になる以上、もっとも基底となる事柄を確実に押さえておかないと何を議論しているのか分からなくなってしまう危険性があるからである。

さて、初学者に教育を与えるという観点にたつと、マズローの基本的欲求の階層図は明らかに錯綜している。ごく簡単に振り返っただけでも、その図は少なくとも5種類あった。すなわち、大別すると、これまで看護学のテキストに多数引用されてきた三角形の階層図と、看護学のテキストではあまり目にする事のない台形の階層図に分かれた。これは、単なる図形の描き方の違いと考えられるかもしれないが、三角形の階層図の場合には、その頂点によって図形が先鋭に閉じている以上、頂点に位置づけられた欲求より上位には欲求が存在しないことを示唆すると、初学者は直感的に解釈するであろう。他方、台形の階層図の場合には、もっとも上位の欲求が位置づけられている部分は、頂点(角)ではなく線分なので、それより上位に他の欲求が位置づけられる可能性があるとして、初学者が直感的に解釈してしまう可能性がある。したがって、基本的欲求の階層図が三角形か台形かを無視するわけにはいかない。

さらに、看護学で紹介されている基本的欲求の階層図の場合には、ほとんどが三角形の5段階の階層図であった。また、その数は多くなかったが、6段階の階層図も確認することができた。他方、台形の場合には、その下位のバリエーションとして、図形内部の欲求は5段階と7段階の2種類があった。このうち5段階の階層図は、さらに2種類に分かれたので、結局のところ、マズローの基



(Potter P. A. & Perry A. G., 1991, "Basic Nursing" p.25 より引用, 印東訳)

図1 マズローの基本的欲求の階層図

本的欲求の階層図は、初学者に向けて少なくとも、看護学で頻りに引用される三角形の5段階モデルを含み5種類の紹介をされていることが明らかになった。

#### 1. 三角形モデル

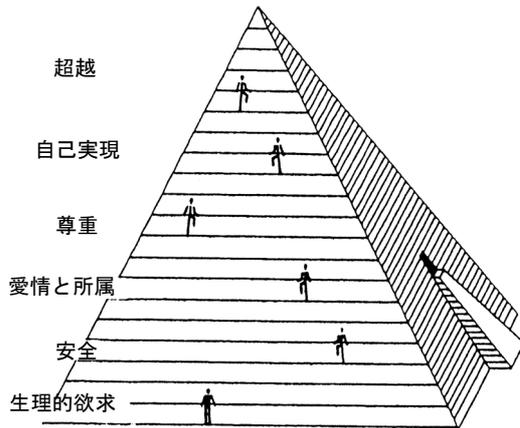
##### 1) 5段階の階層図<sup>5)-8)11)12)</sup>

ここでとりあげたマズローの基本的欲求の階層図は、ほぼ同じであった。したがってここでは、もっとも古い Potter & Perry の階層図に基づいて検討したい。その階層図は5段階であり、それは低次から高次の欲求の順に生理的欲求、安全と安心、愛と所属、自尊心そして自己実現と記述されていた。その基本的欲求の階層図をもとに、Potter & Perry は次の説明を加えた(図1)。

「人間の欲求のうち、いくつかのものは他の欲求と比べてより基本的である。すなわち、人が他者に注意を向ける前に、いくつかの欲求が満たされなくてはならない。……(中略)……人間の欲求の階層は、優先順位に従って5段階の基本的欲求に分類される。空気、水、そして食物のような生理的欲求は第1段階にある。安全と安心の欲求は第2段階にある。愛と所属の欲求は第3段階にある。第4段階は自尊心の欲求である。最終段階は、彼あるいは彼女の潜在能力を十分に発揮する状態である自己実現の欲求で、それは問題を解決し、生活状況に現実的にコーピングすることを意味している。個々人の基本的欲求について考えれば、それはまったく満たされていない場合、一部分だけ満たされている場合、あるいは、完全に満たされているときもあるであろう。欲求が充足されている人は健康的であるが、他方、充足されていない欲求をかかえている人は病気になる危険性、あるいは、ある水準において不健康な状態になる可能性がある」<sup>5)</sup>。

##### 2) 6段階の階層図<sup>13)</sup>

Zimbardoの『現代心理学』は名高い一般心理学のテキストの一つである。このなかで、彼はマズローの基本的欲求の階層図を6段階とし、低次から高次の欲求の順に、



マズローによれば、階層の低い水準の欲求は、充足されない間は優勢を保つ。しかし、ひとたびそれが十分に充足されると、より高水準の欲求が個人の注意と努力を占有する。

(Zimbardo P, 古畑和孝, 平井久監訳, 1983, 『現代心理学』p.448より引用)

図2 マズローの基本的欲求の階層図

生理的欲求、安全、愛情と所属、尊重、自己実現、超越と記述した。その基本的欲求の階層図をもとに、彼は次の説明を加えた(図2)。

「マズローは、個人が、身体的あるいは心的平衡の回復を求める欠乏動機と個人が今までにしてきたことや過去にそうであったことよりもさらに先へ進むことをもつめる成長動機に区別した。……(中略)……人間の生来的欲求は優先性の階層にしたがって配列されている。一つの水準が充足されると次の水準が優越する。このようにして、飢えや渇きのような生理的欲求が充足されると、次の水準である安全欲求の充足がもめられる。これから後は順次、愛情の所属と欲求、尊重への欲求、自己実現への欲求と続く。欲求の階層の頂点は、第6段階の超越である。マズローは自己実現を越え同一性を追求し、個人の人間性さえも超越する究極の人間欲求を表すものとして、この最高水準をつけ加えた」<sup>13)</sup>。

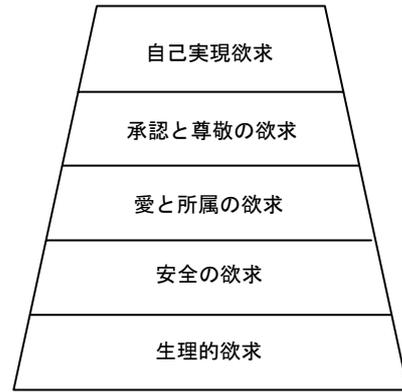
## 2. 台形モデル

### 1) 5段階の階層図

(1) 齊藤<sup>14)</sup>および近田<sup>15)</sup>が紹介した階層図

齊藤は2種類の5段階モデルを提起した。それは、簡略な基本的欲求の階層図と詳細なそれであった。これらのうち、前者に関していえば、近田・奥野が示した基本的欲求の階層図とほぼ同一であるので、それらの代表として、齊藤の階層図(簡略バージョン)をあげておくことにしたい。

その階層図に含まれる基本的欲求は生理的欲求、安全の欲求、愛と所属の欲求、承認と尊厳の欲求、自己実現欲求の5段階であった。また、詳細バージョンには「自己実現欲求」の目標リストが明示されており、それらは



(齊藤勇, 1996, 『イラストレート心理学入門』p.53より引用)

図3 マズローの基本的欲求の階層図

「意味」「自己充実」「無礙」「楽しみ」「豊富」「単純」「秩序」「正義」「完成」「必然」「完全」「個性」「躍動」「美」「善」「真」という徳目で、相互に分節化されていなかった。その基本的欲求の階層図をもとに、齊藤は次の説明を加えた(図3)。

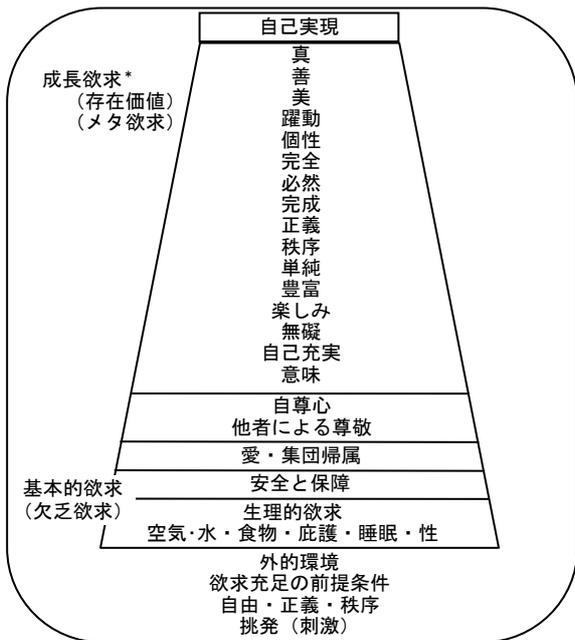
「人間の欲求は階層になっていて、基本的欲求から順番に満たして、ちょうど階段を上るように順次一段上の欲求階層に上っていき、最終的には最上級の自己実現を果たそうとする、という欲求の5段階説を(マズローは)唱えている。

欲求階層の最下層は生理的欲求である。最下層とは、逆にいうと、人間にとってもっとも基本的な欲求ということである。第2階層は安全の欲求である。この安全は身体的安全を意味している。生理的欲求と安全欲求が満たされると、人は急に人恋しくなり、同時に集団への所属の欲求が生まれる。人から好かれ、所属と愛の欲求が満たされると、今度は好かれているだけでは不足と感じ、人から尊敬され、評価されたいという欲求が強くなる。これらの欲求がすべて満たされると、人は自分自身をより成長させようという自己実現欲求によって行動することになる。……(中略)……この階層では、下位の生理的欲求を満たそうとする気持ちから離れて、自由に人間的に生きることができるようである」<sup>14)</sup>。

### (2) 沢(看護学)<sup>16)</sup>の階層図

沢は、基本的欲求の階層を5段階と説明したが、なぜかその階層図は6段階に描かれていた。すなわち、この階層図においては、自己実現の欲求が長方形で囲まれ6段階目に位置づけられていた。このため、このモデルは初学者にとって分かりにくいものになってしまった。その基本的欲求の階層図をもとに、沢は概ね次の説明を加えた(図4)。

「マズローは、人間の欲求を5つに分類し、それらを段階的に並べ、より上位の欲求が満たされるためにはあらかじめその下段に位置する欲求が満たされていなければならないと述べている。第一段の生理的欲求は、生存



\*成長欲求はすべて同等の重要性を持つ(階層的ではない)

(吉田時子, 前田マスヨ監修, 1991, 『標準看護学講座 基礎看護学 1』 p.95 より引用)

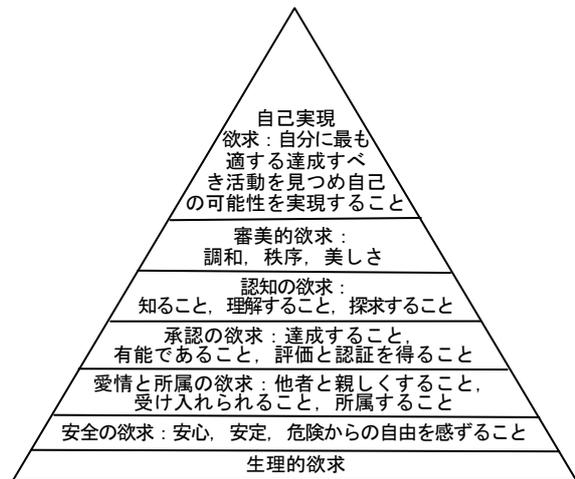
図4 マズローの基本的欲求の階層図

するために必須の条件であるので、他の条件より先行している。次に必要とされるのは生命の安全と保障と保護である。私たちは生活のなかで常に危険から保護され安全でなければならず、そのことを実感している必要がある。次は愛と帰属(所属)の欲求である。どんなに衣食住の生理的欲求が満たされ安全が保障されていても、愛もしくは愛情が注がれていなければ人間は安定して平和に生活できない。次の段階の欲求は尊敬(尊重)である。私たちは家庭においても社会においても価値ある人間として認められたいという「自己尊重」もしくは「尊敬されること」を欲求しているはずである。そして、最上位の欲求として自己実現があり、これは自己の人生の最大の希望がかなえられ、自己の可能性が最高に発揮できる段階である。この段階は生涯の最大の幸せなる愛を感じ、知識に満たされることも含んでいる<sup>16)</sup>。

2) 7段階の階層図<sup>17)18)</sup>。

7段階の階層図は『ヒルガードの心理学』に掲載されている<sup>18)</sup>(図5)。この著作は“*Atkinson & Hilgard's Introduction to Psychology*”であり、初版が1953年に出版されて以降、現在まで14版を重ねており、心理学の入門書として、もっとも権威がある。原典は2段組で700ページを越える大著であるにもかかわらず、第13版(2002)<sup>17)</sup>と第14版(2005)<sup>18)</sup>がそれぞれ邦訳されている。ここでは、後者の記述に基づいて、基本的欲求の階層図を確認しておきたい。

基本的欲求の階層は、低次から高次の順に生理的欲求、



階層の下方にある欲求が、少なくとも部分的に満足されてはじめて、より高次の欲求が、動機として意義を持つことになる。(Abraham H. Maslow (1954), *Hierarchy of Needs*, from “*Motivation and Personality*”を改変)

(Atkinson, R. L. et al. 内田一成監訳, 2005, 『第14版ヒルガードの心理学』 p.619 より引用)

図5 マズローの基本的欲求の階層図

安全の欲求、愛情と所属の欲求、承認の欲求、認知の欲求、審美的欲求そして自己実現欲求であった。その基本的欲求の階層図をもとに、Smithらは次の説明を加えた。

「基本的欲求の階層図は、基本的な生理的欲求から、より複雑な高次の心理的動機づけに至り、それらの高次の欲求は、より低次の欲求が満たされてはじめて重要性を持つ。ある階層の欲求が、少なくとも部分的に満足されて、はじめて、その次の階層の欲求が行動の動機づけとして意味を持つようになる。食料や安全の確保が困難な場合、それらの欲求を満たそうとする努力が、人の行動を支配して、より高次の動機は重要でなくなる。基本的欲求を容易に満足させられる場合にのみ、美的・知的欲求を満たすために、時間と努力を費やすことができる。したがって、食料、家屋や安全を確保することに人々が苦勞している社会では、芸術や科学はさかんではない。もっとも高次の動機である自己実現欲求は、ほかのすべての欲求が満たされてはじめて満足できる状態になる」<sup>18)</sup>。

IV. 問題の再定位

本稿は、ここまでヘンダーソンの『看護の基本となるもの』を正確に理解するためには、マズローの基本的欲求の階層図を十分に理解する必要があるという前提に立って論を進めてきた。その結果、看護学と心理学の両方の——少なくとも初学者向けのテキストにおいて——基本的欲求の階層図が錯綜して紹介されていることを知った。

ここでわれわれは、マズローの基本的欲求の階層図がなぜこのように錯綜してしまったのか、その理由の一端

を明らかにしなければならない。そのために、ここではマズローが基本的欲求の階層図をどのように描いたのかを、改めて問い直す必要がある。あるいは、マズローがその階層図を描いたのではないとすれば、誰が基本的欲求の階層図を最初に描いたのであろうか。また、マズローは基本的欲求の階層図を通して、何を主張したかったのであろうか。

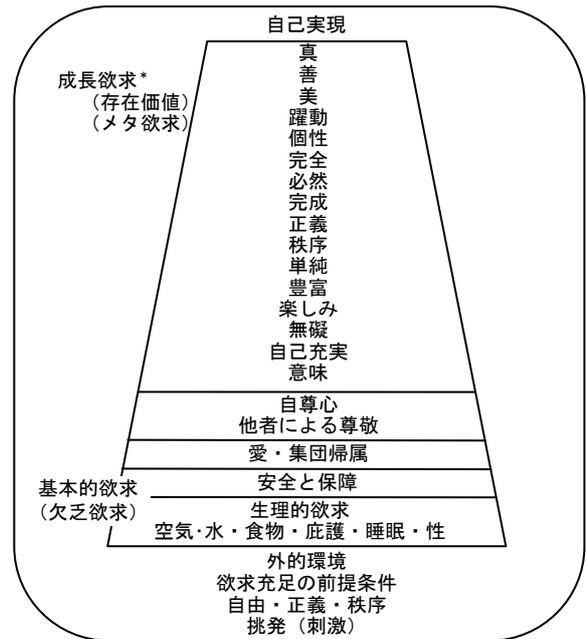
それらの疑問に一定の解が得られた後に、看護学の立場から、これまでの看護学の学生に伝えられてきた事柄の何が変化するのかについて問わなければならない。

### V. マズローは基本的欲求の階層図を描いたのか

基本的欲求の階層図を描いたのはマズローなのであろうか。この問いの提起の仕方では、彼が出版した膨大な全著作に当たらなければならない。限られた時間のなかで、この課題を遂行するのは困難なので、当面はこの範囲を適切に絞ることが必要になる。この根拠として『Atkinson & Hilgard's Introduction to Psychology』における基本的欲求の階層図のレジェンドの不思議な文言に着目をした。それは、第12版(1996)<sup>19)</sup>における“after Maslow, 1970 (a)”であり、また第14版の邦訳書<sup>18)</sup>における「A.H.Maslow (1954), “Hierarchy of Needs”, from *Motivation and Personality* を改変」の箇所であった。なぜ前者においては“on”ではなく“after”なのか。また後者においては「による」ではなく「改変」なのか。

この疑問をいだきながら、『Atkinson & Hilgard's Introduction to Psychology』の第12版および第14版の引用文献リストを確認すると、予想通り『Motivation and Personality』の1954年版(初版)<sup>20)</sup>と1970年版(第2版)<sup>21)</sup>の2冊が掲載されていた。それらの原典をひもといたところ、本稿の最初に述べた通り、マズローは基本的欲求の階層図はもちろんのこと、それに類似した作図を、いっさい行っていないことが明らかになった。

それどころか、マズローは自分の理論を「私の著作は膨大すぎて、専門の研究者以外には読んでもらえない<sup>22)</sup>と述べていた。実は、当時、マズローにはスポークスマンの役割を担った人物がおり、それが Goble であった。彼はカリフォルニア大学バークレー校で機械工学を専攻しており、マズローの膨大な著作、研究論文、講演などを簡潔にまとめることに尽力した。実際、ゴープルはマズローの膨大な著作を簡潔かつ平易にまとめ、その業績は今日でもペーパーバックとして容易に入手できる<sup>23)</sup>。この翻訳は『マズローの心理学』<sup>24)</sup>で、出版以来35年以上を経過しているが、こちらも新刊本として容易に入手できる。この『マズローの心理学』では、マズロー本人が序文を書き、そこで「(この本はマズローの膨大な著作の)構造の真髄がくっきりと分かるように抽象し、



\*成長欲求はすべて同等の重要性を持つ(階層的ではない)

(Goble, F. G., 小口忠彦訳, 1972, 『マズローの心理学』 p.83 より引用)

図6 マズローの基本的欲求の階層図

凝縮し、平易に<sup>22)</sup>書かかれていると絶賛した。ここで、基本的欲求の階層図が初めて描かれたのであった。

『マズローの心理学』において、基本的欲求の階層図は5つの欲求を含んでいた。それらは低次から高次の順に生理的(空気・水・食物・庇護・睡眠・性)、安全と安定、愛・集団所属、自尊心・他者による尊敬(承認)、そして自己実現であった<sup>24)</sup>(対応する英語は順に“Physiological Air, Water, Food, Shelter, Sleep, Sex” “Safety and Security” “Love & Belongingness” “Self Esteem/ Esteem by Others” “Self Actualization”であった<sup>23)</sup>。

そして、その自己実現を達するための存在価値(成長欲求)のリストが「意味」「自己充実」「無礙」「楽しみ」「豊富」「単純」「秩序」「正義」「完成」「必然」「完全」「個性」「躍動」「美」「善」「真」であった。これらの徳目は相互に分節化されないで、基本的欲求の階層図の一番上の区切りの内側に大きなスペースを与えて配置されていた(図6)。

さらに、台形の下底の外側には、基本的欲求の充足の前提条件が明記されていた。興味深いことは、基本的欲求の階層図の欄外には「成長欲求はすべて同等の重要性をもつ(階層的ではない)<sup>24)</sup>という注が記されていた点であり、そこではマズローが発見した成長欲求のリストの間には階層関係がないことが指摘されていた。ゴープルの著作から基本的欲求の階層のみを抜き出して要約すると次のようになる。

基本的欲求は階層をなしており、低次の欲求から高次の欲求に向かう順番に生理的欲求、安全の欲求、所属と

愛の欲求, 承認の欲求, そして自己実現の欲求である。原則として, より高次の欲求は, 低次の欲求が満たされてはじめて重要性を持つが, しかしながら多くの例外がある。たとえば, ある人々は, 他人からの愛よりも自己承認を求めようとするかもしれない。あるいは, 長期にわたり失業していた人は, 食料だけを探していた歳月が経過した後では, 高次の欲求を喪失あるいは鈍磨されてしまっているかもしれない。

そして, このような個人の動機づけと深く関連しているのは, ある個人が生きている社会のなかの環境あるいは社会的な諸条件である。マズローは, 話す自由, 他者に害を及ぼさないかぎりやりたいことができる自由, 探求の自由, 自分自身を弁護する自由, 正義, 正直, 公平, そして秩序を基本的欲求の満足の前提条件と当初考えていたが, その後, 前提条件をもう一つ追加した。この条件が外的環境における挑戦(刺激)であった。これらの前提条件が満たされており, かつ愛と承認の欲求がある程度満たされた後に, 自己実現の欲求は発生する<sup>24)</sup>。

## VI. マズローの真意：原典からの新解釈

マズローは, ゴーブルの著作を「(マズローの膨大な研究の) 構造の真髄がくっきりと分かるように抽象し, 凝縮し, 平易に」<sup>24)</sup> 書かれていると絶賛した。

ゴープルは基本的欲求の階層図の前提条件を記述したが, これはマズローが述べていたことであった。また, 基本的欲求における階層性の例外についても, マズローほど詳細には論じていないものの, ゴープルは適切に論じていた。また「これらの前提条件が満たされており, かつ愛と承認の欲求がある程度満たされた後に, 自己実現の欲求は発生する」と, ゴープルは書いたが, これも「より低次の欲求は, 次の(高次の) 欲求が現れる前に100%満たされなければならないと考えるのは誤っている」というマズローの主張と同じであった。このように重要な箇所は, ゴープルがマズローの主張を正しく伝えているといえるであろう。

しかしながら, ゴープルの基本的欲求の階層図にはいくつかの問題点がみられた。その最大のものは, この階層図に欠乏-成長欲求が書き加えられていたことであった。本来, 欠乏-成長欲求は高次欲求論と呼ばれ, 欲求の階層理論とは別の理論なのである。

そして「欲求の階層図における生理的欲求, 安全欲求, 所属と愛情の欲求, 尊重欲求などの区分はそれぞれ質的相違をあらわすものではなく, それほど明確な区分ではない」<sup>25)</sup> のだが, このことをゴープルの欲求の階層図から読み取ることは容易ではない。さらに, 初学者にとって分かりにくい表現は, 自己実現が台形モデルの線分の外側に配置されていた点であり, これでは5段階の基本

的欲求のほかに, 自己実現の欲求が別にあると勘違いする学生がいても不思議ではなからう。

基本的欲求の階層図に限っていえば, マズローがこの図を描いていなかった事実は, 彼の原典にあたればすぐに分かることであった。たとえば, マズロー研究の第一人者の上田<sup>25)</sup> は基本的欲求の階層理論をとりあげたとき, 階層図を一度も取り上げずに理論を説明していた。上田のこの姿勢こそ, 本稿を通して, われわれがもっとも学ぶべき事柄であったといえるかもしれない。

## VII. マズローの真意からみた基本的欲求の階層図の評価

ゴープルの業績は別にして, 本稿で検討した5種類の基本的欲求の階層図はどのように評価されることになるのだろうか。厳密に言えば, 適切な基本的欲求の階層図は一つもないということになる。ただし, 基準を緩めると, それらのなかでもっともマズローの真意に近かったのは, 沢<sup>16)</sup> であろう。彼女たちの基本的欲求の階層図の解説文には, 確かに5段階と書かれていた。しかしながら, 残念なことに, 彼女たちは, 自己実現の目標である存在価値(成長欲求)のリストと自己実現の間に勝手に線分を引いてしまい, 初学者がそれを読んだ場合には, 基本的欲求の階層図とその説明の間に矛盾があるとしか読み取れなかったであろう。

マズローの基本的欲求の階層図を5段階であると正しく指摘したのは, 齊藤<sup>14)</sup> および近田・奥野<sup>15)</sup> がいた。しかしながら, 後者のモデルには自己実現の目標リストが省略されていたし, また両者とも, 基本的欲求満足の前提条件を, なぜか省略してしまった。あるいは, 基本的欲求の階層という観点からすると, Potter&Perry<sup>5)</sup> の図は三角形モデルではあったが近似値とは言えるかもしれない。

それでは, マズローの基本的欲求の階層図がなぜこれほど不適切に伝わったのかを考えてみたい。これは, 今さら証拠が得られる問いではないので, 確たる回答を提起できないが, おそらく基本的欲求の階層図を描いたのがマズロー本人ではなく, ゴープルであったためではないかと推測できる。せめて, もしゴープルがマズローの学問上の高弟であったとしたら, 事態はどのように変わっていたであろうか。学問上の歴史的な事実とそれと反する仮定をもちこんでも何も始まらないが, 興味深い問いではあろう。

それに加え, これまでの欲求の階層図と比較し, マズローの主張をより適切に伝えうる図がどのようなものか, マズローの欲求の階層理論と高次欲求論を基に, マズローの原典である“*Motivation and Personality*”<sup>20)</sup> <sup>21)</sup>と“*Toward a Psychology of Being*” (邦訳書 完全なる人間<sup>26)</sup>), ゴー

ブルの著作『*The Third Force: The Psychology of Abraham Maslow*』<sup>23)</sup>に戻り、考えてみたい。

まず、本図の形については、前述したように、マズローが承認したゴープルの基本的欲求の階層図（図6）に依拠し、台形とした。

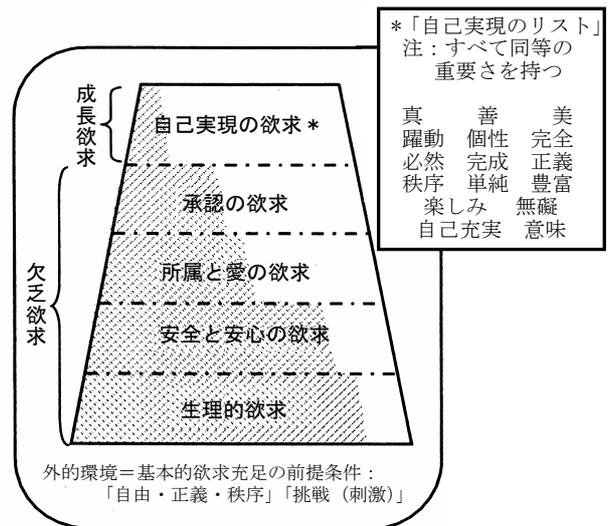
次に、基本的欲求の階層図の階層部分について、以下のように考える。マズローの欲求の階層論によると、その階層は生理的欲求、安全と安心の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求から構成される。このことから、階層数を5つとした。その階層の面積については、高次欲求論から、この図を見ると5つの階層の面積に大きく差をつけることが正しいが、この図では欲求の階層理論を検討したためそれらに大きな差をつけず、自己実現の欲求のリストを階層図の右側に記した。その階層間の境界線を破線で示した理由は、これら5つの階層間に厳密な階層性が仮定できないことであった。そして、各階層の網掛けの意味は、「生理的欲求は85%、安全の欲求は70%、愛の欲求は50%、自尊心の欲求は40%、自己実現の欲求は10%が充足されているのが普通の人間ではないか」<sup>9)</sup>というマズローの主張と対応したもので、図7では、その割合を各階層に網掛けで示した。

高次欲求論によると、自己実現の欲求を成長欲求として、生理的欲求、安全と安心の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求を欠乏欲求として区別し、「成長欲求と欠乏欲求は質的相違があり、欠乏欲求が成長欲求の必要条件となる」<sup>26)</sup>と述べていることから、図7においてそれらの区別を明示した。また、ゴープルの階層図では「成長欲求はすべて同等の重要性を持つ」<sup>24)</sup>という注記をしたが、この発言は重要と考えられるため、図7では右上に注記した。

最後に、看護学で用いられた多くの階層図で明記していなかったもので重要と考えられる基本的欲求充分の前提条件について、「自由、正義、秩序」、行動を決定する要因の「外的環境」あるいはゴープルの著作からマズローが後に追加したとされる「外的環境の予備条件としての挑戦（刺激）」、そしてゴープルの階層図に記された「外的環境、欲求充足の前提条件、自由・正義・秩序、挑戦（刺激）」を基に文章化し、本図では階層図の底辺の外側に記した。

## VIII. 看護学への応用

これまでマズローの基本的欲求の階層図について検討し、新たな階層図を提案した。ここで、マズローの基本的欲求の階層論が看護学において看護の対象である人間の見方のひとつとして用いられていることに注目し、その階層図が図7へ変わった場合、看護学に対しどのような影響が生じるか考えてみたい。



注：基本的欲求を4つの欠乏欲求と成長欲求に区別し、階層性を示唆したが、斜線の割合で満たされている状態が平均的と述べている

図7 マズローの基本的欲求の階層図

本稿で図7を提案する意義は2つある。その1つは、図7がこれまで看護学に紹介されてきたマズローの階層図と異なり、その階層の境界線を破線で、一般的な人間の欲求充足の状態を網掛けで図示したことから、その階層の変動性に気づく可能性が高まるだろう。つまり、マズローが恐れていた「基本的欲求の階層は不動のものではない、次の欲求が現れる前に前の欲求が100%満たされなければならないという誤った印象を与える」<sup>27)</sup>ことを、回避することができるようになる。生理的欲求が満たされなければ、それより上位の欲求は満たされるはずがないという勘違いを犯さずにすむ。例えば、入院患者の看護援助を計画する際、患者の生理的欲求だけでなく安全と安心の欲求も、所属と愛の欲求も、承認の欲求も、合わせて考えることができるようになるだろう。もう1つは、マズローの基本的欲求充足の前提条件を改めて確認できることである。

「自由・正義・秩序」と「挑戦（刺激）」ができる「外的環境」があることが基本的欲求の前提であるならば、看護援助として基本的欲求を満たすことだけでなく、この外的環境を整えること、それを擁護することの重要性が強調されるであろう。

以上のように、本稿で新たに提起した図7のマズローの基本的欲求の階層図は、看護の対象である人間の見方の基盤理論を強化し、看護実践・研究の一層の開発や実践へつながっていくにちがいない。

## 引用文献

- 1) Henderson V. (1995). 看護の基本となるもの. 湯楨ます, 小玉香津子訳. 17-20. 東京: 日本看護出版会.

- 2) Tomei, A. M. (2004). 看護理論家とその業績. 小島香津子訳, 都留伸子監訳. 110. 東京: 医学書院.
- 3) Henderson V, Nite G. (1979). 看護の原理と実際Ⅱ 観察・評価と看護婦の役割. 荒井蝶子, 辛嶋佐代子, 季羽倭文子, 小島操子, 近藤潤子, 田島桂子, 野島良子, 波多野梗子, 樋口康子, 外間邦江, 松本美登, 南裕子, 矢野正子監訳. 285-288. 東京: メヂカルフレンド社.
- 4) Henderson V. (1994). 看護論: 25年後の追記を添えて定義およびその実践, 研究, 教育との関連. 湯槇ます, 小玉香津子訳. 32. 東京: 日本看護協会出版会.
- 5) Potter, A.P, Perry, A.G. (1991). Basic Nursing: Theory and Practice (2nd ed). 25-30. St. Louis: Mosby-Year Book.
- 6) 長谷川万希子. (2006). 2章 看護の対象としての人間 A.人間の欲求と健康. 藤崎郁著, 長谷川万希子, 林千冬, 平河勝美, 中根薫, 稲垣絹代, 柳澤理子, 大野かおり. 系統看護学講座専門1 基礎看護学〔1〕看護学概論 (14版). 68-70. 東京: 医学書院.
- 7) 宮脇美保子. (2006). Ⅱ看護活動展開の方法 ①看護過程. 深井喜代子, 前田ひとみ編. 基礎看護学テキスト EBN 志向の看護実践. 19. 東京: 南江堂.
- 8) 高田早苗, 正木みどり. (2004). 1章6節 看護実践のための理論的根拠. 川村佐和子, 志自岐康子, 松尾ミヨ子編. ナーシング・グラフィカ16 基礎看護学: 看護学概論. 137. 大阪: メディカ出版.
- 9) Maslow, A. (1971). 人間性の心理学. 小口忠彦監訳. 100-111. 東京: 産業能率大学出版部.
- 10) 村瀬孝雄, 伊藤研一. (2004). 26章 マズロー: 第三勢力の心理学. 末永俊郎 監訳, 心理学群像2 . 143-166. 京都: アカデミア出版.
- 11) 志自岐康子. (2004). 2章1節 看護の対象. 川村佐和子, 志自岐康子, 松尾ミヨ子編. ナーシング・グラフィカ⑩ 基礎看護学: 看護学概論. 160-164. 大阪: メディカ出版.
- 12) 勝野とわ子, 横井郁子. (2004). 4章 看護過程. 川村佐和子, 志自岐康子, 松尾ミヨ子編. ナーシング・グラフィカ⑩ 基礎看護学: 看護学概論. 203. 大阪: メディカ出版.
- 13) Zimbardo, P. (1983). 現代心理学Ⅱ. 古畑和孝・平井久監訳. 447-449. 東京: サイエンス社.
- 14) 齊藤勇. (1996). イラストレート心理学入門. 53-55. 東京: 誠信書房.
- 15) 近田敬子, 奥野信行. (2004). 10章 生活と看護. 野嶋佐由美編. 明解看護学双書1 基礎看護学Ⅰ (2版). 151-168. 京都: 金芳堂.
- 16) 沢禮子編著. (1991). 2章 看護の対象. 吉田時子, 前田マスヨ監訳. 標準看護学講座12 基礎看護学Ⅰ (3版). 94-96. 東京: 金原出版.
- 17) Atkinson, R. L., Atkinson, R. C., Smith, E. E., Bem, D. J, Nolen-Hoeksema, S. (2002). 13版ヒルガードの心理学. 内田一成監訳. 875-878. 東京: プレーン出版.
- 18) Smith, E. E, Nolen-Hoeksema, S, Fredrickson, B.L, Loftus, G. R. (2005). 14版ヒルガードの心理学. 内田一成監訳. 618-620. 東京: プレーン社.
- 19) Atkinson, R.L., Atkinson, R.C., Smith, E. E., Bem, D.J., Nolen-Houseman, S. (1996). Hilgard's Introduction to Psychology (Twelfth ed). 466-467. Fort Worth: Harcourt Brace.
- 20) Maslow, A. (1954). Motivation and Personality. 80-106. New York: Harper & Row.
- 21) Maslow, A. (1970). Motiration and Personality (2nd ed). 35-58. New York: Harper & Row.
- 22) Maslow, A. (1972). マズローのまえがき. 小口忠彦監訳. マズローの心理学. IX-XVI. 東京: 産業能率大学出版部.
- 23) Goble, F. G. (1971). The Third Force: The Psychology of Abraham Maslow. 52. New York: Pocket Books.
- 24) Goble, F. G. (1972). マズローの心理学. 小口忠彦監訳. 59-84. 東京: 産業能率大学出版部.
- 25) 上田吉一. (1988). 人間の完成: マズロー心理学研究. 59. 東京: 誠信書房.
- 26) Maslow, A. (1998). 上田吉一訳. 完全なる人間 魂のめざすもの (2版). 25-33. 東京: 誠信書房.
- 27) Maslow, A. (1987). [改訂新版] 人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ. 小口忠彦監訳. 72-74, 80-87. 東京: 産業能率大学出版部.